

大阪女学院大学生の通訳ボランティア経験

友 野 百 枝

A case study of OJ students having on-the-job training

Momoe Tomono

抄 録

OJT（職業の実地訓練）のもたらす教育的効果は議論の余地のないところである。通訳について教室外での実習の大切さは認識されながらも、なかなか条件が揃わず実現できないというのが現実であった。

今回、図らずも ITAA という大阪で8月に開催された大きな国際会議に OJ から8名の学生をボランティアとして派遣する機会を得た。いくつかの仕事を任されて実行し、主催者からその貢献が認められた。

成功は、大学側のサポート、指導教官の献身、そして学生の勇気と不屈の精神があっこそ成し遂げられた。しかし、今後もこのような活動を継続していくためには課題も多い。今回の経験を詳細に報告する。

キーワード：TA、国際大会、OJT、ボランティア通訳

(2013年10月1日受理)

Abstract

This report attempts to record the experience of eight OJU students volunteering in the annual conference of the International Association of Transactional Analysis held in Osaka in August 2013. Supported by the OJ management, staff and faculty members, students did well fulfilling various job responsibilities. It was also the first time that our students have worked as volunteer interpreters in conference sessions.

There have been opportunities for our students to volunteer in international English teacher conferences in Japan, but the details of recruiting, training and their performance assessments have not been documented.

There is no doubt that OJT (on-the-job training) brings multiple benefits to students, such as using their English skills in a real situation, working in a team, and trying higher level skills of interpreting. By documenting the details of the students' experience, the author wishes to make this report useful for those who may be organizing OJT programs in the future.

Key words: TA, international conference, OJT (on-the-job training), interpreting

(Received October 1, 2013)

1. はじめに

2013年8月15 - 18日の3日間、ITAA 国際大会 in Osaka という大規模な国際会議に、大阪女学院大学の学生8名をボランティアとして派遣する機会を得た。学生にとっては、OJT (on-the-job training) の好機になったので、その経験を受注の経緯から結果の評価まで、指導者、監督者の立場から報告したい。今回のボランティア活動の内容は、①受付、日本文化紹介のイベントサポート、と②分科会の通訳の仕事の2分野に渡ったが、より高度な英語力、スキルが求められた通訳の仕事を中心に報告する。

まず通訳分野のOJTの意義については、次のDaniel Gile(1994)の記述を待つまでもなく、自明である。

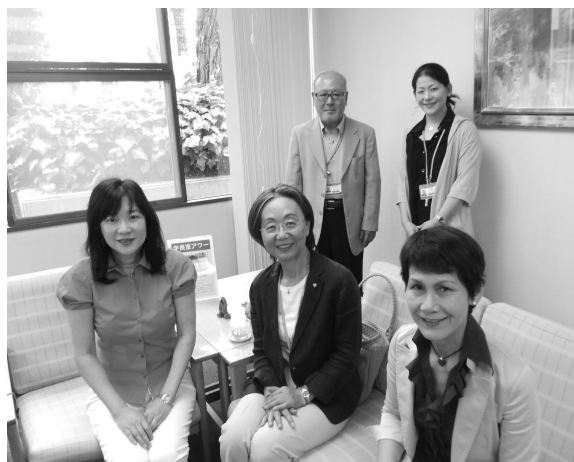
Interpreting skills are specialized skills in a particular setting, so OJT gives a reality check for students who are used to studying only in a class room with 'artificiality problems'. Translation exercises in formal training are by definition artificial. Although texts or speeches may be taken from professional reality, at school they are processed under artificial conditions. They may therefore be less relevant and less efficient as pedagogical tools than texts assigned to trainees on the job training. Similarly, knowledge acquired at OJT is by definition totally relevant, while knowledge acquired at schools is not.

本来実践的なスキルである通訳を教室という人工的なセッティングでいくら学んでも、現場で実際にスピーカーがいて、聴衆がいるというリアルな設定から得られる知識、経験に勝るものはないのである。ただ、OJTの実現には、実習生を受け入れてくれる寛容な会議のオーガナイザーと、実習生を訓練し、さらに現場でもサポートする熱心な指導者が必須であるし、地理的な条件、タイミングなど全ての条件が揃わないと実行不可能である。今回は全てに恵まれた稀なケースであった。

2. この活動を受けるまでの経緯

2013年5月に突然大学の事務局からの打診があった。8月に大阪国際会議場で開かれるITAA 国際大会に大阪女学院大学の学生たちをボランティアとして派遣することが可能かどうかという問い合わせだった。本学の坪井直寿先生が今回の国際大会のボランティアコーディネーターの関口英臣氏とかつて同僚だった縁から打診があったとのことであった。TA (Transactional Analysis 交流分析) の会員である本学の中西美和先生もサポート

に加わってくれるとのことであり、大学として支援することを学長も表明してくださいました。まずは6月7日に ITAA 国際大会の事務局長を務める安部朋子さんが大阪女学院（以下 OJ）に挨拶と説明に来てくださって、我々全員が学長室でミーティングを持ち、その日が出発点となった。



学長室で関係者の初顔合わせ

ITAA というのは、International Transactional Analysis Association の略で、日本語では「国際 TA 協会」と呼ばれ、今回の国際大会は TA の実践家、精神科医、心理カウンセラー、教師、企業の人事担当者など 500-600 名が大阪に結集する大きな会議であることがわかった。海外からの参加者も 80 名くらい予想されるので、通訳はプロ通訳とボランティア通訳の二本立てで計画しているとのことであった。

3. 学内のサポート体制の構築と募集

大学として支援をしてくれるとのこと、3名の教員のほかに学生サポート担当の田中一江さんが加わってくれた。これにより、布陣はさらに強力なものとなった。

まずは、学内の募集を始めることになったが、安部さんの一回目の説明では学生ボランティアにやって欲しい仕事の内容がまだ具体的には見えてこなかった。まずは受付、書籍販売、日本文化紹介の仕事があるということで、これをまとめて会場サポートスタッフと呼ぶことにした。こちらは比較的想像しやすく、本学の学生で十分に果たせる職務であると考えた。

次に分科会でのボランティア通訳に関しては、一体どんなスピーカーがどんな内容で話し、聞く人はどんな人たちなのかを探る必要があった。さらに通訳の形式は同時なのか、逐次なのか、サマリー通訳なのか、ウィスパリングなのかもわからない状態であった。場合によっては本学の学生にはまだ到底無理な内容なのではないかという危惧があった。依頼側が考えている本学の学生の通訳能力レベルと、実際のレベルに大きなギャップがあると分かった。

しかしながら、めったにない機会なので、何らかの形で本学の学生を通訳の現場に立たせる態勢を整えたいという願いがあった。例え通訳者としての仕事は十分に果たせなくても、無理のない形で見習いをさせるだけでも十分に意義があると思ったのだ。一方でこの仕事は実務であり、参加者は高い参加費を払って来る訳なので、決して迷惑をかけられな

いというジレンマもあり、判断には随分苦しんだ。ITAA 事務局からの情報もまだ十分でなかったので、もう少し時間をかけて探っていくことにした。

とりあえずは、会場サポートスタッフの募集には学内のボランティアセンターの協力を得て、ポスターを掲示して呼びかけた。会話に不自由のないレベルの英語力が必要と考え、TOEICスコアが600点以上の学生という条件で募集した。最終的に5名が応募してくれた。内訳は、卒業生で教職のために5年目を履修している学生1名、4年生2名、2年生1名とOJの提携校であるニューヨークのクイーンズカレッジからの留学生1名である。

通訳スタッフのほうは、800点以上という条件を設けたため、応募した学生は4名にとどまった。(4年生3名、3年生1名)しかしながらやる気のある4名だったので、訓練すれば十分いけると考えた。(うち3年生の学生は個人的な都合から途中で辞退)

4. 仕事と条件の明確化

6月12日にITAAの安部さんが再びOJに来てくれて、学生たちとの初顔合わせ及びオリエンテーションをしてくれた。応募していた5名のボランティアが出席して、安部さんの説明を聞いた。TAとはそもそもどんなものか?どれほどの規模の会議か?参加者はどんな職業の人たちか?スピーカーはどんな人たちか?などなど色々な説明をしてくれた。2011年に開かれたモンリオールの大会のプログラムをお借りしてコピーを全員に配ることにより、多少イメージが明瞭になってきた。どんな参考書を読めばいいかなどの具体的な準備方法も教わった。TA用語集も配布した。短時間の説明では不安を解消するほどの情報は得られなかったが、安部さんの熱意とにこやかな笑顔、さらに「皆さんにいい成功体験を味わっていただきたい」という前向きな励ましで学生たちの緊張も多少和らいだ。ベストを尽くせば失敗は恐れなくてもいいという感触を得たようであった。7月に2日間に渡って開催される「TA101」というTAの基礎講座に招待されたので、その機会を通じて徐々に内容がわかっていくものと考えた。



学生のためのオリエンテーション

この時点で、ボランティア活動の条件を明確にする必要があった。日時、場所、待遇面での明確化が必要だった。相手からのオファーはなかったが、ボランティアといえども交通費と昼食代を支給して頂くようお願いした。8月15日から17日までの3日間の会場フリーパスも用意してくれ、ボランティア専用のTシャツも作ってくれる約束ができた。

また、指導教師の3名の役割分担もだんだんと明確になってきた。会場スタッフのお世話と関口氏との連絡など、OJサイドの総合的な窓口を坪井先生が引き受けてくださったので、筆者は通訳スタッフの教育訓練に専念できた。さらに中西先生は会場スタッフのお世話と通訳ボランティアの心理学に関する質問に答える役割を引き受けてくださった。

5. 準備のプラン作り

当初、会場スタッフにも English for specific purposes (ESP) のような英語訓練が必要かと考えていたが、応募してきた5名の多くはあまり英語を話すことに不安がないようなので、このグループは特別な訓練は必要なしと考えた。

問題は通訳スタッフの訓練であるが、会議の内容や通訳の役割が徐々に明確になるほどに任される仕事は相当レベルの高い、また責任を伴う仕事であることがわかってきた。ひとつのセッションを2名のボランティア通訳者がチームで担当することになったが、OJ学生だけのチームに通訳業務を任せるのは荷が重過ぎると結論づけた。ではどういう形で参加させるかという問題であるが、非常にラッキーなことに筆者が教えているサイマルアカデミー大阪校のセミナーというクラスの受講生が関心を示し、5名が応募してくれた。こちらの5名+ OJの学生3名により4つのチームができた。各チームが3日間に2-3のセッションの通訳をするスケジュールが組まれた。その際、大阪女学院の学生のパートナーはサイマルアカデミーの生徒になるように組み合わせた。

サイマルアカデミーの生徒は、実際の通訳経験はほとんど無い人が多かったが、数年間通訳養成コースを受講しているのので、事前に資料さえ手に入れば十分に通訳できる力があるのはわかっていた。ただ、OJの学生3名がパートナーとなると彼女たちのお世話もする形になるので負担が大きすぎないかを真剣に考えた。OJの通訳ボランティア3名はTOEICスコアで900点前後の優秀な学生であるとは言え、通訳の訓練を多少授業で受けただけの学生と、翻訳の授業は取ったが通訳は授業でさえ未経験という学生のグループであった。さらに今回、心理学や精神医学などかなり専門的な言葉も概念も出てくる仕事であるから、本人たちの不安は想像に難くない。限られた時間の中で、6月に2回、7月に3回、8月に1回の計6回の通訳特訓を行なった。筆者以外に、一回の授業は非常勤講師の宮元友之先生に担当していただいた。

TAに関しては、7月に1回、中西先生が講義してくださった。主催者による「TA101」のセミナーが7月14日と28日に開かれたので、1回目と2回目の間の24日に行なった。また、8月7日には坪井先生による全般的な確認と、「ボランティアの心構え」に関する講義をして頂いた。詳細は、巻末の添付資料1 特別訓練スケジュールを参照願いたい。

6. 通訳特別訓練

6回の授業でカバーできる練習時間は到底十分なものではなく、例え全ての時間を通訳

練習に費やしてもそれで一気に通訳スキルが大幅に向上するとは考え難い。そこで、まずは不安に感じている点に集中的に対策を打つことを考えた。アンケートにより、3名の学生が通訳の仕事に対して不安に思う点は次の3点だとわかった。

- A. TAの知識の不足
- B. 英語のリスニング力不足
- C. パートナーの足手まといにならないか

まず、Aの不安に対しては、「TA101」の講義に出席して内容をよく把握すること、薦められた参考書や用語集を読みこなすこと、自分なりの訳語集を作成して記憶すること、自分の受け持ちのセッションの資料が届いたら徹底的に調べてわからないところは心理学の先生にお聞きすることなどをアドバイスした。

Bの不安に関しては、即効薬はないものの、残された時間の中でできるだけ現場の状況に近い形で英語のプレゼンを聞き、それを訳してみることを薦めた。授業の中でいくつか心理学関係のTEDトークを聞かせ、訳させた。TEDには他にも心理学に関したものがあるはずだから自分で調べて、好きなものを毎日最低15分聞いてその記録をノートに残すよう指示した。もうひとつ導入したのがlistening journal (logともいう)である。SLA(第二言語習得)の学習者が自律的にリスニングの力を伸ばすために用いられる手法で(Kemp, 2010)、今日聞いたトークの内容、どこがわかったがどこが分かりにくかったか、新しく憶えた単語などをとにかく全部、日記のようにノートに書くようにさせた。数日毎に筆者に提出させてチェックし、コメントを加えて返した。この作業はモチベーションを上げるのに有効で、かつ非常に楽しんで続けている様子が手にとるようにわかった。とにかく毎日、3週間続けること、というシンプルなルールで始めたが、「この間よく分からなかったところが今日のはっきり聞き取れた！」など、大きな効果を生んでいることがわかった。



CALL 教室での通訳訓練の様子

リスニング力の向上には普段の地道な努力しかないことが実感できたようである。

Cに関しては、気持はわかるものの、相手は10歳以上年上の先輩だから社会経験、常識においても英語の駆使力においても対等に張り合おうと思っても所詮無理な話、と言いつ聞かせた。相手も納得の上でペアを組んでいるので、心配する必要はないと説明した。それよりも、準備段階においてリサーチなど時間のかかる作業で貢献できることを進んで実行するとか、実際の通訳の場で何か貢献できることを率先してやろうと励ました。卑屈になる必要はないが、かと言って全てお任せで横に座って聞くだけでは学ぶことも少ないので、自分も積極的に関わることを薦めた。そして、準備がよくできて自信のある部分は通訳をさせてもらうよう説得した。チームワークが大事なので早めに相手に会ってメールアドレスを交換して、連絡を密にとることにより、いい関係を築くようにアドバイスした。

7. 通訳本番

OJU/サイマルアカデミーの4チームで3日間に10のセッションの通訳を行なった。(タイトルとスピーカーは巻末の添付資料2を参照)その内、英語でプレゼンが行なわれたセッションは7つ、日本語は3つであった。テーマは、非常に理論的なものから、参加型のワークショップ形式のものまで多岐にわたった。ボランティア通訳者がスピーカーのメールアドレスをもらって直接連絡を取るという条件だったので、約一ヶ月前から連絡を取り始めた。スピーカーが日本人の場合は比較的早くから資料を送ってもらえたが、外国人の場合は概して直前に送られてくることが多かった。2人ほどの外国人スピーカーは、当日あるいは前日の夜まで資料を渡してくれなかった。通訳者としては大変困る状況であるが、それでも「置かれた状況の中で最善を尽くす」ことに徹底し、あまりパニックにならないよう指導した。

スピーカーとのブリーフィングは必ずやってもらうようにした。スピーカーの中には数日前から大阪入りしている人もいたので、早めに会って打ち合わせができたケースもあれば、本番直前にしか会えないケースもあった。パワーポイント用のスライドが会場のプロジェクターで映せないのも、その問題の解決に通訳者が四苦八苦する場面もあった。

また、日本人のスピーカーの場合は、オーディエンスに外国人がいたら英語に通訳するつもりで用意してきていたが、いざ本番の蓋を開けてみたら、外国人はひとりもいないので通訳が全く必要ないという、いわゆる「空振り」のセッションもあった。気の毒ではあったが、通訳の現場というものは想定外のことが多々あるので、それでいちいちパニックにならないで冷静に対応する姿勢を学ぶことを指導した。

筆者は指導者の立場から学生の通訳パフォーマンスを聞きたい希望はあったものの、教官がいることで萎縮するのを恐れて、極力邪魔をしないように努めた。写真は撮らせてくれる約束だったので、写真を撮る口実で会場を巡り、通訳の状況を観察した。ほとんどはサイマルの先輩が通訳している横で、必死にメモを取っているOJ学生の姿があった。しかし、ワークショップ形式でいくつかの小グループに分かれて討論する場面とか、終了

後同時に複数からの質問が出たときは OJ の学生が通訳している様子が見られた。先輩の通訳に感嘆しながらも、一方で自分の限られた役割を忠実に確実に果たそうとする姿勢が見られた。



セッションの通訳の様子

8. 活動を終えた後の感想

全てのセッションの通訳の直後に「今の通訳を振り返って」というアンケート用紙に記入してもらった。いくつかの項目の中で、「自分のパフォーマンスを5段階で評価してください」というものがあったが、OJ生とサイマルアカデミーの生徒の結果は次のグラフのようになった。

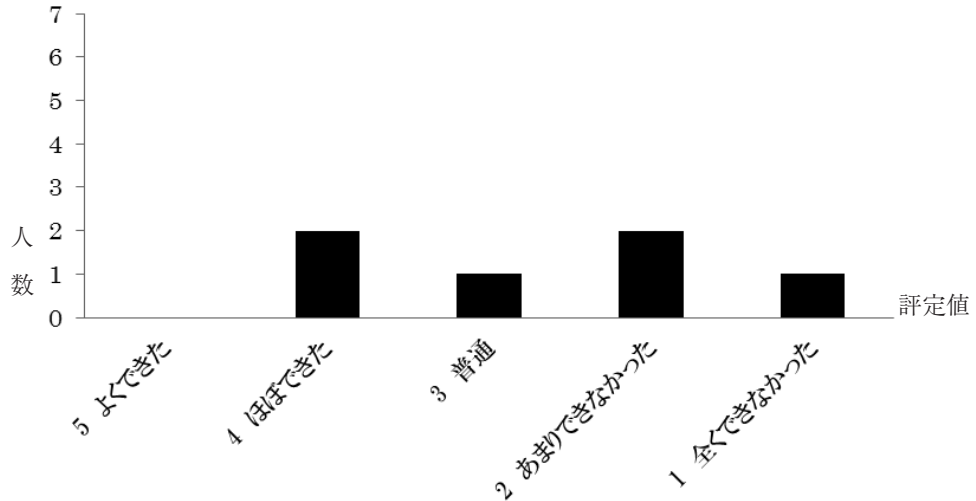


図1 OJ生の自己評価

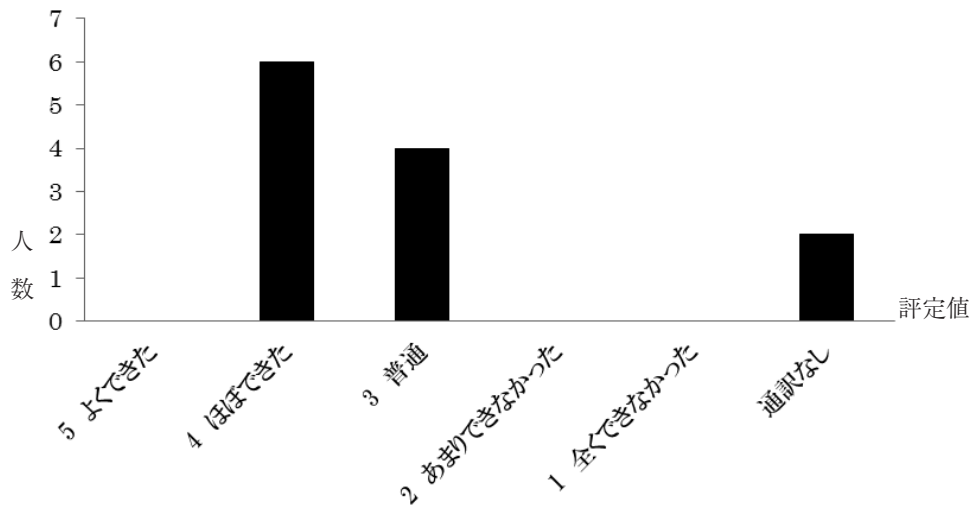


図2 サイマルアカデミー生の自己評価

OJ生の自己評価の理由は次のようなものだった。

- 1 (全くできなかった) の理由：専門用語が多くてついていけなかった。
- 2 (あまりできなかった) の理由：日英を何箇所かさせてもらったが、理論だっていない参加者の話をまとめることが出来ないまま訳してしまい、支離滅裂になってしまった。
- 3 (普通) の理由：思ったより落ち着いて臨むことができた。
- 4 (ほぼできた) の理由：前日までは何もできなかったが、この日は役割を果たすことが出来たから。
- 5 (よくできた) の理由：通訳（ウイスパリング）を担当した中国の方に感謝してもらえた。

同じ質問に対するサイマルアカデミー生の自己評価の理由は下の通りである。

3の理由：

- * スピーカーの話を中断できずに困った。その場合には無理に全部を訳そうとしないで、分かる範囲で要約をしたので話の流れを止めずすんだと思う。
- * セッションの冒頭は緊張して普通ならすぐに出てくる訳語に詰まってしまった。

4の理由：

- * 事前に原稿があったので、サイトラ（原稿を見ながら訳す方法）に近い形だった。突然原稿から離れたときの対応がイマイチだった。
- * スピーカーに聞き返す場面もあったが、嘘をつかずにポイントを伝えることができたと思う。
- * Image induction のワークショップだったので、できるだけスピーカーが醸し出す雰囲気壊さないようにつとめた。
- * PPT がプロジェクトできず、その対応に時間がかかったけれど、準備不足の割には落ち着いてできた。途中とまったことが反省点。
- * 3時間の長いセッションだったので、最後はガス欠状態だったが、何とかやり終えた。
- * ウィスパリングの通訳は慣れないので苦労したが、スピーカーがゆっくり話してくれたので、ポイントは伝えられた。

9. アンケートにみる成果および今後に向けての課題

成果については非常に大きなものがあったと思う。通訳を終えて、スピーカーから“You are amazing!”などの最大級の感謝の言葉をかけられていた。学生たちの表情から今までの緊張感は消え、ほっとした笑顔が浮かんでいた。自由記述式のアンケートには次のようなプラスの感想が書かれていた。

- * 「本物の」学会での通訳は刺激的だった。
- * ハプニング満載だったが、その中でもパートナーと知恵を絞って切り抜けられた。
- * Google に助けられた。準備の大切さを痛感した。
- * 初めての「甘えられない」状況での通訳経験となった。トラブルがあっても、できることをやるという姿勢が大事だとわかった。もっと頑張るって通訳になりたいという思いを強くする経験だった。
- * 未知の分野だったが、思ったより頑張れたことで自信につながった。
- * 通訳するだけでなく、人とのつながりを感じた。
- * 自分の今の力ではエイジェントからオファーがありそうもないレベルの仕事に挑戦できた。(以上通訳学校の生徒)
- * 先輩のパートナーには感激し通しだった。(大学生)

次に課題としては次のような回答があった。

- *タブレットに入れて来たPPTがPCでプロジェクトできず、その手伝いで大変な時間と労力を要した。
- *参加者が集まらないセッションがあり、せっかく準備してきた外国のスピーカーを気の毒に思った。通訳者も残念だった。
- *机やマイクの準備ができていなかった。
- *パートナーとの分担においては自分のことばかり気にとられていて、後輩に辛い思いをさせてしまった。(以上サイマルアカデミー生)
- *とても自分がかかりすぎたけど、悔しさが次へのばねになると思う。(OJ生)

10. 指導者の立場からの感想

10.1 通訳の仕事に関して

- *学生たちは大変よくやった。ルールを敷くことだけ助けてあげれば、彼らは自力で頑張れる。彼らがその実感を持てたのがよかった。
- *会議のスピーカーも参加者も心の専門家たちだけあって、褒めの言葉、感謝の言葉を忘れないのありがたかった。学生たちにとってそれが何よりのrewardである。
- *パニックになっても、協力して乗り切ることを経験してもらえた。
- *先輩が後輩と組んで役割を分担しながら準備することを経験してもらえた。後輩にも、リサーチ等で役割を果たせることがあることを実感してもらった。
- *学部生にとっては自力ではできない高い内容の通訳を少し先に行く先輩たちと仕事をすることで、見習えた。

同時に、今後とも継続していくにはいくつかの課題が残されたのも事実である。以下、いくつかの論点を挙げてみたい。

ひとつは指導者の負担の問題である。今回は3人の教員が担当したので役割の分担ができ、事務局のサポートもあったので、大きな助けになった。しかし、それでも尚、大変な時間とエネルギーを要するプロジェクトであったことは否めない。今回は何もかもが初めての経験だったので、指導者の裁量に頼る部分が大きかったが、今後継続してこのような機会があれば先輩が後輩を指導する体制も生まれるのではないかと思う。

もうひとつは、通訳エイジェンシーとの関係である。一部の講演にはプロの通訳者も入っている会議だったので、ボランティア通訳を引率する立場で大変気を遣う面もあった。通訳エイジェンシーが通訳学校と同じグループの会社だったので、事前に了承を得ていたが、会場で働くプロの通訳者にとってはやり難い状況だったかもしれない。いつも好意的に対応してもらえるとは限らないことを憶えておかなければならない。

一方で、学生のレベルを良く知らない事務局の方々が色々と判断ミスをする場合があった。全く悪意はないのだが、学部生の力を過信して色々と追加的な注文を出してきた。例えば、直前に発生する通訳のニーズを安易にボランティア通訳に依頼してくるケースがあった。打ち合わせで会った講師から直接に他の仕事を依頼される場合もあった。間に入った指導者がきっぱりとできることとできないことを区別しないと混乱が起こる。断りにくい立場の学生が都合よく無料で使われることがないように指導者の監視が必要である。

10. 2 会場サポートの仕事に関して

会場スタッフの活動については、坪井先生、中西先生からアンケートで回答をいただいた。指摘された問題点のいくつかを挙げてみたい。

- * 学生とのコミュニケーションがスムーズに行かない点があった。具体的にはメール連絡をしても返信をしない学生がいて困った。
- * 会場受付の学生は午前の受付混雑時を除くと、時間を持て余した感が有った。にもかかわらず、常時2名待機という事務局からの指示で、せっかくの学会ワークショップの見学が自由にできなかった。もっと積極的に海外からの参加者と話せる機会を設けてあげたらよかったのと思う。
- * 和菓子作りのデモンストレーションとお茶席の説明を会場スタッフの学生が通訳したが、内容が直前にしか伝えてもらえず、準備する時間の余裕がなかった。前もってわかっている内容だったと思うので、先方からの情報を早く学生に知らせて欲しかった。
- * 会場にはボランティアの大学生は他にも多くいた。当日になってわかったことであるが、一部の学生たちはアルバイトとして有償で働いていた。OJのボランティアと仕事の内容に差があるように思えなかったので、疑問に思った。
- * 3名の教師が協力し、OJのスタッフ、学生、サイマルの学生がうまくまとまって仕事にあたれた。学長以下の大学のサポート、ボランティアセンターの協力、そして手を挙げてくれた学生の勇気とやる気があったからこそ成功裡に終わることができた。

11. おわりに

冒頭で述べた通り、通訳の技術を学生に修得させるには教室外の実習が欠かせない。教員養成に教職実習が義務付けられているように、あるいは医師養成に研修医の期間が設けられているように、通訳者を目指す者も実際に報酬を得て仕事をする前の訓練期間に通訳実習なりインターンシップを経験することが理想である。

ところが、現在日本の100以上の大学で通訳科目が教えられているにもかかわらず(染谷ほか, 2005)、教室外で学生が通訳の実習をする機会は学部レベルでは皆無に等しい。筆者が把握している限り、大学院レベルで通訳を教えている神戸女学院大学研究科と東京外国語大学の研究科ではOJT、あるいは通訳実習を熱心に正規の授業の中で行なっている



仕事を終えて

が、他にはあまり例がない（鶴田ほか，2010）。このふたつの大学院でも、実習先を教師の個人的なコネクションに頼ることが多いので、非常に負担が大きいと聞いている。わが国では通訳の案件を受注するのは通訳会社が圧倒的に多いという事情によるものである。その意味で、今回の大阪女学院大学の学部生の通訳ボランティア経験は、9月初めに行なわれた日本通訳翻訳学会年次大会でも他大学からの注目を集めた。このレポートが、関心を寄せてくれた諸先生方の参考になり、今後このような機会が増えていくことを希望している。また、大阪女学院大学の今後のボランティア活動のひとつのたたき台になれば幸いである。

引用文献

- Gile, D. (1994). *Basic Concepts and Models for Interpreter and Translator Training*. Amsterdam/Philadelphia: Benjamins.
- Kemp, J. (2010). The Listening Log: motivating autonomous learning, *ELT Journal*.
- 染谷泰正・斎藤美和子・鶴田知佳子・田中深雪・稲生衣代（2005）. わが国の大学・大学院における通訳教育の実態調査、*通訳研究* 5, 285-310.
- 鶴田知佳・内藤稔（2010）. 通訳教育における実習指導のあり方 *東京外国語大学論集* 80, 365-374.

添付資料1：**ITTA 通訳の準備のための勉強会&講習会 日程**

- 6月12日(水) 16:40-18:10 & 18:10-1:40
全員集めての顔合わせ 安部先生のお話
今後の予定を確認
ボランティア全員に連絡先、勉強会の日取りの都合を尋ねるアンケート用紙に記入
今後の連絡の取り方などを確認。
- 6月18日(火): 5限 408にて 通訳訓練① オリエンテーション 勉強の仕方など
社説音読/英語で自己紹介→ 録音
TEDのプレゼンを使った聞きとり
宿題:TEDのSusan Cain 'The power of introverts'を聞いてくる。訳す準備。
TEDの心理学関係のほかのトークも探してくる。
- 6月28日(金) 4限 408 ② 通訳訓練 (友野)
- 7月5日(金) 4限 ③ 通訳訓練 (友野)
- 7月12日(金)4限 ④ 通訳訓練 (宮元友之先生)
- 7月14日(日)10:00-17:00 大阪国際会議場にて安部先生の講習会① 全員参加が望ましい
通訳のペアの顔合わせ
- 7月19日(金)4限 ⑤ 通訳訓練(友野)
- 7月24日(水) 5限 TAについての基礎知識レクチャー(中西担当)
- 7月28日(日) 10:00-17:00 大阪国際会議場にて安部先生による講習会② 全員参加
- 8月2日(金) 4限 ⑥ 通訳訓練(友野)
- 8月7日(水) 5限 ITAA国際大会にボランティアとして参加する心構えについて(坪井先生
担当)全員参加がのぞましい
- 8月15-17日 ITAA 国際大会 in Osaka 本番**
- 9月15日 学内でのふりかえり&打ち上げ

添付資料 2 : **OJ/サイマルアカデミーの生徒のチームが担当したセッションのリスト**

- 1 . Waves of grief by Ann Heathcote (UK)
- 2 . Mutually beneficial process of research and practical work by Roland Johansson(Sweden)
- 3 . Linking TA with Shanbhala principle by Nancy Porter-Steel and Curtis Steel (US/Canada)
- 4 . New beginnings in Transactional training by Sabine Klingenberg (Germany)
- 5 . Recovery and rebirth of embodied relational mind by John Heath(UK)
- 6 . Chinese scripts by Thomas Ohlsson (Sweden)
- 7 . What do you say to your clients after they say goodbye to themselves? by Tommy Kvarnloef (Sweden)
- 8 . 人生の立場とコンセンサス 北村嘉伸
- 9 . 産業保健に従事する人に対する TA 理論と人格適応論の応用 吉田途男
- 10 . 人生脚本に気づき、望ましい未来を手に入れる 吉田日出美、吉田瑛彦

